

## 急性期実習における手術見学の意義に関する一考察

呉大学看護学部

一色 康子

大阪市立看護専門学校

河野 政子

元島根県立看護短期大学

磯岩 壽満子

### ■ はじめに

看護職は、生命に関わる職種であるとともに、あらゆる看護の場面において人の生と死を看取る機会に出会う職種である。しかしながら、現在の社会事情のなかで、看護職をめざす若者達の多くは人の生と死に積極的に関わるという機会から遠ざけられ、その上、人との関わりの乏しいまま看護を学び、臨地実習へ導入されることになる。なかでも急性期実習の学習内容に位置づけられる周手術期看護学実習において、学生はその健康段階の持つ特徴的なイメージ、例えば患者および患者周辺の状況変化の速さに圧倒されるため、そのスピードについていけず、ベットサイドに足を向けること、患者のケアに参加することができないという状況に遭遇することがある。このような現象は学習が深まらないまま、実習終了を迎える原因の一つにもなる<sup>1)</sup>。

そこで今回は、急性期実習のなかで最も緊迫した手術場面の見学を通して、学生が“人の生と死”についてどのように感じたかについて記述した内容をまとめ、臨地実習における手術見学の意義について考察してみた。

### ■ 研究方法

平成11年4月～12月にかけて急性期実習を体験したS看護短期大学・看護学科学生80名に対して、実習終了直後、無記名にて自記式質問調査を実施した。質問項目は17項目から構成されているが、本報では、『実際に受け持ち患者の手術を見学して、人の生死についてどのように感じましたか』

という質問に対して、学生が自由記載した内容をK-J法を用いて7つのグループに分類した上で、その各々にカテゴリーを名付けた。

### ■ 結果および考察

急性期実習終了直後80名に質問紙を配布し、74名から回答が得られた(回収率92.5%)。さらに前記質問内容については、39名からの回答を得た。手術見学の概要は、大半以上が一般外科病棟において全身麻酔下での手術を受ける対象を受け持つケースであり、一部の学生については呼吸器・心臓血管外科の手術を受ける対象を受け持つケースであった。

質問に対する記述内容を7つのグループに分類したその各々については、1) 生へのイメージ 2) 死へのイメージ 3) 生死に対する緊迫感 4) 生死に対する無意識 5) 死生観の転換 6) 手術への期待・感動 7) その他とカテゴリーを名付けた。また各々のカテゴリーに属するコードについては、表1にまとめた。

#### 1. カテゴリーが意味するもの

手術中、患者は麻酔の影響により全ての自発的行動および生理的機能を抑制されるため、危険を自己回避することができず、自らのいのちを他者にゆだねることになる。

今回、手術見学を体験した多くの学生が、手術療法を受けている患者を目の当たりにして抱いたイメージの多くは、カテゴリーの『生へのイメージ』、『生死に対する緊迫感』の内容に該当するものであった。これらの内容からも察することがで

いっしき やすこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

表1 手術見学直後、学生が人の生死について感じた内容

カテゴリー	コード
1 生へのイメージ	1) 命の重さ・尊さ・大きさを感じた(3) 2) 生死は運命・紙一重(3) 3) 一人一人の命は本当に大切だと実感した(2) 4) 生死はゆっくり、ゆるやかというイメージ(1) 5) 人の生命力はすごいと思った(3) 6) 人はそう簡単に死なない(2) 7) 手術を受ける患者は生きる選択をしている(3) 8) 手術により「生」は延びる(3) 9) 手術に対する恐怖を乗り越える姿は強い(1) 10) 手術に耐える人は強い(1)
2 死へのイメージ	1) 手術を受けている患者は死に直面している(2) 2) 死は誰にでも平等にやって来る(1)
3 生死に対する緊迫感	1) 手術は生死を賭けた戦い(2) 2) 手術時のトラブルが人の生死を左右する(1) 3) 手術中何があってもおかしくないと感じた(1) 4) 手術後の回復までには山がある(1)
4 生死に対する無意識	1) 手術中死に対する印象はなかった(3) 2) 手術中思ったよりも危機感がなかった(1)
5 死生観の転換	1) 死を体験していないので死ぬことが考えられないが、もし死を体験したら、前後で死生観が変わるだろう(1)
6 手術への期待感動	1) 医療や技術が進歩すれば、人の命はもっと助かるだろう(1) 2) 身体を切ったり人工的に物をつけたり、大がかりな延命処置に感動(2)
7 その他	1) 痛だけが死と結びつくのではないと感じた(1)

N=39 ( ) は人数を示す

きるように、学生は手術療法を受けている患者の生命力、回復力の素晴らしさに感動するとともに、その患者を取り巻く周辺事情を通して、身体的侵襲を受けた人間が、いかに自助能力を発揮して回復していくかという手術後の回復過程について側面から支援していくのが看護師の役割であると強く認識する。さらに手術療法を受けている人間の強さ、生命の尊さ、生きることの厳しさを感じた学生も多く、まさに今、“いのち”と向き合っている現実のなかで、生きるための援助について考えることを意識付けられる機会にもなる。その反面、カテゴリーの『死へのイメージ』の内容のように手術を通して死を感じた学生もおり、麻酔や手術侵襲の身体への影響が、生命を脅かす危険なものと感じているようである。しかし相対的に、手術が直接死と結びつくものであるというイメージは薄く、学生は手術療法を受ける患者は生きる選択をしていると考えており、手術台に横たわっている患者を目の前にして、どんな人生を送っても、行き着くところは死であると感じているようである。また『生死に対する無意識』では、学生は手術療法を受けている患者を通して生と死、なかでも死についてショックな出来事だとは捉えておらず、危機感のない状態で手術見学に臨んだ様子が窺われる。さらに『手術への期待・感動』では、手術場面において、学生は術者が手術野を操作するその手技を直接見学することにより、手術が患者のいのちを救い延ばすという意味で、その有益性に期待・感動していると言えよう。

## 2. 手術見学時のイメージが、患者帰室直後からの学生の看護に与える影響

急性期実習においては患者の回復(悪化)が速いため、学生は目の前で変化する患者の現象を確実に把握・アセスメントしてケアにつなげていくことが難しい<sup>2)</sup>。特に周手術期看護学実習においては、手術療法に臨む患者の身体的側面、心理的側面、社会的側面および家族背景といった対象の理解について短期間で行わなければならない。その上、手術というダイナミックな変化を捉えてケアしていくため、患者のみならず患者の周辺事情をよく理解した上でケア計画を立案する必要がある。

また近年マス・メディアを通じて手術に関する報道が一般化されてきているとは言え、学生にとって手術は非日常的でリアリティー・ショックを受け易い事象である。さらに日常の実習環境から手術室という未知なる学習環境での見学実習への移行により、学生自身が緊張と不安を強く感じる事が予測される。その上カリキュラムのなかでこの部分の学習量が少なく、終始体験を伴えない学習であるため、実習を展開するにあたり知識の統合化、既習の技術の選択・工夫までに到達しないまま、実習終了を迎えてしまうということも多々ある。その上、学生は手術を受けている厳しい状況下にある患者を直視することにより、その時に抱いたイメージが脳裏に刷り込まれてしまうために、患者が病室に帰室した後、術中のイメージを引きずったまま患者のベットサイドに向かうことになる。それに加えて、術後医療機器に囲まれ、それらを装着してベットに横たわっている患者を前にして驚きと緊張を示すことになり、患者に声をかけ、身体に触れることができないまま実習時間を過ごしてしまうことにもなりかねない。

そのため手術場面が録画されているVTRを事前に活用する、グループカンファレンスの中で、手術見学者からの感想を聞くなどして、できるだけ現実に近いイメージ作りをした上で、手術見学に臨むことが必要である。

## 3. 手術見学の意義

最近、小・中・高校の教科活動の中で、“いのち”について考えさせる授業を展開している教師達がいることを紹介された<sup>3)</sup>。彼らは、学校教育の現場で“生と死”という普遍的なテーマについて倫理学、宗教学、人間学、哲学といった様々な教科活動を通して、子ども達が生きること、死ぬ

ことについて考えられるよう配慮している。これと同じく、看護が対象とするのも“人間”である。看護学生が出会う場面は、いかなる場面も“いのち”が主題であり、常に彼らは“いのち”と向き合っていかなければならない。質問に対する自由記載の内容から、学生は手術見学を通して“患者が生きている人間である”ということを実感しており、“いのち”を身近に感じていると言えよう。看護職は直接人の生と死に関わる職種であるからこそ、このような体験を通して“いのち”に触れ、“いのち”について考え、“いのち”あるものを愛しむ気持ちを育ててほしいと願う。また人の生き様は多様であるがゆえに多くの死が存在することにもなる。“生”について考えることは“死”について考えることにもなり、さらに深く一番自分の問題であるべき生と死について考えられるようになる<sup>4)</sup>。そこには患者を含めた多くの人間と関わる中で、個々の価値観（死生観）に触れ、それを尊重することができるだけの自己の柔軟性が必要になるであろう。

以上のことから、S看護短期大学の急性期実習

における手術見学は、その後続く回復過程への援助について学ぶ導入の時期であるとともに、人の生と死について考える機会にもなり、学生自身が自己の内面を見つめる良い機会になるものとも言えよう。

## ■ おわりに

急性期実習において手術見学を体験した学生に対する質問紙への記入内容を分析した結果、7つのグループに分類された。学生の多くは、手術療法を受ける患者が生死の狭間にある姿を目の前にして“生のイメージ”を抱き、その上、生きるための援助を意識づけられる機会にもなる。さらに“かけがえのない多くの生命”と向き合うことによって自己の死生観を養うことにもなるため、学生自身の人間的な成長につながり、しっかりとした考えを持って患者とふれ合うことができるようになるだろう。以上のような点で、手術見学はいのちについて考える機会となりうるものである。

## 文 献

- 1) 野田美紀, 遠藤久美, 下平唯子, 岡部聰子: 周手術期看護学実習における学生の学び. 東京都立医療技術短期大学紀要. 第10号: 221-229, 1997
- 2) 氏家幸子監修: 成人看護学. 急性期にある患者の看護 I. クリティカルケア. 廣川書店. 12-13, 1998
- 3) 鈴木康明編集: 生と死から学ぶいのちの教育. 現代のエスプリ. 至文堂. 394: 5-38, 2000
- 4) 小原 信: 倫理的判断のための基本的な考え方. ターミナルケア. 三輪書店. 7: 204-214, 1997